㊟　七番日記、座五「何〻目」

○木枯や諸勧化いれぬ小制札

㊟　文政版発句集初出

九月尽

○今日まではまめで鳴たよきり〴〵す

㊟　七番日記（文化9・5）・句稿消息・志多良

㊟　七番日記、前書なし。句稿消息・志多良、上五「けふ迄は」。文政版発句集、上五「けふまでは」。

行秋を尾花がさらば〳〵かな

㊟　句稿消息・稿本発句題叢・希杖本句集

㊟　句稿消息・発句題叢、座五「さらば哉」。七番日記（10・9）・発句鈔追加、中七以下「尾花もさらば〳〵哉」。

㊐ 稿本発句題叢・希杖本句集

㊟ 発句題叢・希杖本、座五「うつくしき」。

大茸馬糞も時を得たりけり

㊐ 稿本発句題叢・発句鈔追加・希杖本句集

㊟ 発句題叢・希杖本、前書「馬屎茸」。発句鈔追加、上五「大きのこ」。

○茸狩のから手で戻る騒かな

㊐ 八番日記（文政2・9）・おらが春・斗囿あて書簡（文政3・9・14付）

㊟ 八番日記、上五・中七「茸がりのから手でもどる」。書簡、中七「から手でもどる」。

戸隠山

○初梨の天から降た社だん(壇)かな

㊐ 文政句帳（8・9）

○柿の木であいと答へる小僧哉

㊐ 八番日記（文政3・9）

㊟ 中七「あえ(い)〔と〕こたいる(へ)」。

小布施

○拾はぬ栗の見事よ大きさよ

㊐ 七番日記（文化10・9）

柿の実や幾日ころげて麓迄

㊐ 嘉永版発句集初出

虱をひねりつぶさんことのいたはしく、又門に捨て断食さするも見るに忍ばざる折から、御仏の鬼の母にあてがひたまふものを、ふと思ひ出して。

我味の柘榴へ這す虱かな

㊐ 八番日記（文政3・9）

㊟ 前文「虱のにくさに捻りつぶさんもいたわ(は)しく、又草に捨て断食させんも見るに忍ざる折から、鬼の母に仏のあこがひ(て)給ふこと思ひけるまゝに」。中七「柘榴に這す」。八番日記（3・1）、「我味〔に〕かはらぬ柘榴あてがふぞ」「人味の柘榴へ這す虱かな」「彼岸とて袖に這する虱かな」。文政九・十年句帳写、前書「しらみをひねり潰さんことの痛しや、又門に捨て断喰(食)させんもいと哀也。御仏の鬼の母に与へ給ふものをふと思ひつけて」。「人味の石榴にはす虱哉」。

老の身は今から寒さも苦になりて

○山畠や蕎麦の白さもぞっとする

㊐ 文政句帳（7・11）

㊟ 中七「そばの白さも」。七番日記（14・8）、上五・中七「しなのぢやそばの白さも」。

○秋の夜や障子の穴の笛をふく

㊐ 我春集

㊟ 中七「せうじ(しや)の穴が」の誤りか。我春集、中七以下「せうじ(しや)の穴が笛を吹」。七番日記（8・9）、中七以下「窓の小穴が笛を吹」。

○庵の夜や寝あまる罪は何貫目

㊐ 七番日記（文化10・8）・句稿消息

㊀　文政版発句集初出
㊟　上五「門に立」。

鍬の柄に子(小)僧の名あり菊の花

㊀　八番日記（文政2・9）
㊟　中七「小僧の名有」。

○大菊や今度長崎から抔と

㊀　八番日記（文政4・9）・文政九・十年句帳写（10・7）・希杖本句集
㊟　八番日記以下、座五「よりなどゝ」。

酒臭き黄昏ころや菊の花

㊀　嘉永版発句集初出

○勝た菊大名小路通りけり

㊀　文政版発句集初出
㊟　七番日記（文化15・9）・だん袋、上五「勝菊は」。座五「もどりけり」。八番日記（3・9）、上五「勝菊の」。「座五帰りけり」。梅塵本八番日記（文政3）、上五「勝菊は」。座五「通りけり」。

菊園や歩行ながらの小酒盛

㊀　八番日記（文政2・9）・おらが春
㊟　座五「小酒盛」は「小盃」の誤りか。八番日記・おらが春、中七以下「歩きながらの小盃」。

○まけ菊をひとり見直す夕かな

㊀　板本発句題叢
㊟　稿本発句題叢、「負菊を乞と見直す一人哉」。希杖本句集、「負菊を吃と見直す一人かな」。文政版発句集（5・9）、「負菊をじつと見直す独かな」。

後の月

○月の顔年は十三そこらかな

㊀　八番日記（文政4・9）
㊟　前書なし。座五「そこら哉」。

名所紅葉

○欠椀も同じ流れや立田川

㊀　文政句帳（5・8、12）
㊟　文政句帳（5・8）、前書なし。中七「同流や」。同（5・12）、前書「紅葉浮水」

○棹鹿の水涕拭ふ紅葉かな

㊀　文化三―八年句日記写（文化4）・連句稿裏書・希杖本句集
㊟　日記写、上五・中七「小男鹿の水鼻ぬぐふ」。連句稿裏書、上五・中七「小〔男〕鹿の水鼻拭ふ」。希杖本句集、「小男鹿の水涕ぬぐふ紅葉哉」。稿本発句題叢、「さをしかが水涕ぬぐふ紅葉哉」。

○大寺の片戸さしけり夕紅葉

㊀　文政版発句集初出
㊟　七番日記（文化8・9）、上五・中七「大寺や片〳〵戸ざす」。

毒茸

○人をとる茸はたして美しき

㊟ 全集本、文政版発句集・嘉永版発句集とも上五「しぎ鳴や」と校訂を誤る。八番日記（4・9）、上五「日の本や」。同（4・9）、上五・中七「しほらしやおく山鹿も」。だん袋、上五・中七「しほらしや深山の鹿も」。

鹿鳴や今二三町遠からば

㊟ 八番日記（文政2・9）

㊟ 上五「鳴鹿や」の誤り。八番日記、上五「鳴鹿や」。

○やさしさや鹿も恋路を迷ふ山

㊟ 文政版発句集初出

㊟ 中七「鹿も恋路に」。文政句帳（6・9）、「おく山の鹿も恋路に迷ふ哉」。

○人ありと見せる草履や田番小屋

㊟ 文政句帳（5・8）

㊟ 上五「人居ると」の誤りか。文政句帳、上五「人居ると」。

米穀下直(値)にて下々なんぎなるべしとは、こと国の人うらやましからん。

○日本の外ヶ浜まで落穂哉

㊟ 七番日記（文化15・12）

㊟ 前文なし。

○旅人の垣根にはさむおち穂哉

㊟ 文政版発句集初出

㊟ 文政句帳（5・8）、中七以下「藪に」はさみし稲穂哉」。だん袋、旅人が藪ニはさミし稲穂哉」。

今年米親といふ字を拝みけり

㊟ 八番日記（文政2・9）

㊟ 中七「親と云字を」。

ことし米我等が小菜も青みけり

㊟ 稿本発句題叢・発句鈔追加・希杖本句集

○姨捨はあれに候とかゝし哉

㊟ 七番日記（文化15・8）・碩斎あて書簡（文化15・9・9・）・稿本発句題叢・希杖本句集

㊟ 書簡・希杖本句集、座五「かゝしかな」。文政句帳（6・7）、座五「夕かゝし」。

乳呑子の風余にたつかゝし哉

㊟ 八番日記（文政2・7）・おらが春・斗囿あて書簡（文政3・9・14）

㊟ 八番日記、中七「風よけに立」。おらが春・書簡、前書「二番休」。中七「風よけに立」。文政句帳（8・9）、上五・中七「つぐらの子風除に立」。

○人はいさ直なかゝしもなかりけり

㊟ 文政版発句集初出

㊟ 中七「直な案山子も」。

○穂芒や細き心のさわがしき

㊟ 文政版発句集・発句鈔追加

爰に正風院、此奥に百花あり

○門にたつ菊や下戸なら通さじと

出　七番日記（文化8・7）・我春集

注　七番日記・我春集、上五「はつ雁や」。

初雁や芒はまねく人は追ふ

出　七番日記（文化8・7）・我春集・希杖本句集

注　七番日記、上五「はつ藪や」。

旅にありて

○雁啼やあはれ今年も片月見

出　文政版発句集初出

初雁もとまるや恋の軽井沢

出　八番日記（文政2・9）

注　上五・中七「はつ雁も泊るや」。

○白川や曲り直して天津雁

出　七番日記（文化11・8）

信濃雪ふり

○田の雁や里の人数はけふも減る

出　七番日記（文化8・7）

注　七番日記、座五「けふもへる」。稿本発句題叢、中七以下「村の人数ハけふもへる」。我春集、「雁鳴や村の人数はけふもへる」。希杖本句集、上五・中七「初雁や里の人数は」。

○おちつくと直に鳴けり小田の雁

出　文化句帳（3・8）

注　座五「小田〔の〕雁」。

○天津雁おれが松にはおりぬなり

出　文政版発句集初出

注　座五「おりぬ也」。

○朝夕や峯の小雀の門馴る

出　文化句帳（3・8）・稿本発句題叢・希杖本句集

注　文化句帳以下、座五「門なるゝ」。

○立鴫のいまにはじめぬ夕かな

出　享和二年句日記（夏～秋）

注　座五「ゆふべかな」「ゆふべ哉」。「けぶり哉」。

○普陀らくや蛇も御法の窩に入

出　八番日記（文政4・9）

注　八番日記、上五「ふだらくや」。座五「穴に入」。

○蛇も入穴はもつぞよ鈍太郎

出　八番日記（文政3・9）

注　中七「穴はもつ也」の誤りであろう。八番日記、中七「穴はもつ也」。

○足枕手枕鹿のむつまじや

出　七番日記（文化11・8）・稿本発句題叢・希杖本句集

山寺や椽の上なる鹿の声

出　八番日記（文政2・9）・おらが春

注　八番日記、中七以下「縁(椽)の上つるし(な)〔か〕の声」。梅塵本、「縁(椽)の上なるしかの声」。

しき嶋や深山の鹿も色好む

出　文政版発句集初出

○影法師に恥よ夜寒のむだ歩行

出　おらが春・斗囿あて書簡（文政3・9・14付）

注　おらが春、座五「むだ歩き」。八番日記（2・12）、前書「若僧に対して」。中七以下「恥よ夜永のむだ歩き」。同（4・9）、前書なし。中七以下「恥よ夜永のむだ歩き」。

旅

○一人と帳面につく夜寒かな

出　文政版発句集・希杖本句集

注　七番日記（15・6）、中七以下「書留らるゝ夜寒哉」。同（15・7）、中七以下「帳に付たる夜寒哉」。

膝がしら木曽の夜寒に古びけり

出　嘉永版発句集・発句鈔追加

注　発句鈔追加、上五「膝頭」。七番日記（12・8）、上五・中七「膝頭山の夜寒に」。

行灯を畑に置て碪かな

出　梅塵本八番日記（文政2）

注　中七「畑に居(ゑ)へて」の誤りか。梅塵本八番日記、中七以下「畑に居(ゑ)へて砧かな」。

○草藪も君が代を吹小夜ぎぬた

出　稿本発句題叢・希杖本句集

注　発句題叢、座五「小夜砧」。

雨の夜やつい(ひ)隣りなる小夜碪

出　八番日記（文政2・8）

注　中七以下「つい(ひ)隣なる小夜ぎぬた」。

梟が拍子とるなり小夜ぎぬた

出　八番日記（文政2・9）

注　中七「拍子とる也」。

飯けむり賑ひにけり夕ぎぬた

出　嘉永版発句集初出

豊　秋

○二軒家や二軒餅つく秋の雨

出　梅塵本八番日記（文政3）

注　風間本八番日記（3・9）、上五「二軒やは」。

外ヶ浜

○今日からは日本の雁ぞ楽に寝よ

出　七番日記（文化9・8）・株番・稿本発句題叢・あとまつり

注　七番日記・発句題叢、前書なし。七番日記以下(含文政版発句集)、上五「けふからは」。希杖本句集、上五「これからは」。

初雁の三羽も竿となりにけり

出　八番日記（文政2・8）

注　座五「成にけり」。

小組を呼おろしけり小田の雁

出　八番日記（文政2・8）

注　上五「大組を」の誤り。八番日記、上五「大組を」。文政句帳（5・8）、上五・中七「大組の空見おくるや」。

初雁やあてにして来る庵の畠

八月廿九日善光寺詣

本堂の柱に長崎の旧友たれかれ、八月廿八日詣るとしるしてありけるに、今は三十年余りの昔ならん、おのれ彼地にとゞまりて、一つ鍋のもの喰ひて笑ひのゝしり、むつましき人達なり。あはれきのふ参りたらんには面会して、こしかた語りて心なぐさまんものを、互ひに四百余里の道程へだゝりぬれば、ふたゝび此世には逢がたき齢にしあれば、しきりにしたはしくなつかしくなむ。

○近づきの楽書見えて秋の暮

㊀　文政版発句集初出

㊟　文政版発句集、中七「楽書見へて」。文政句帳(5・9)、前書「善光寺の柱に長崎の旧友昨二日通るとありけるに」。上五・中七「知た名のらく書見へて」。だん袋、前書「善光寺ニ詣けるに、長崎の旧友きのふ通るとありければ」。上五・中七「知た名の楽書見へて」。

茶店万灯日ましにへりぬ

○両国の両方ともに夜寒かな

㊀　七番日記(文化10・7)・志多良

㊟　七番日記、前書なし。座五「夜寒哉」。志多良・文政版発句集、座五「夜寒哉」。句稿消息、前書「茶店の万灯きのふと成りぬ」。中七以下「両方一度に夜寒哉」。希杖本句集、前書なし。中七以下「両方一度に夜寒哉」。

うそ寒や親といふ字を知てから

㊀　七番日記(文化10・9)・句稿消息(補遺)

㊟　七番日記・句稿消息、前書「周流諸国五十年」。句稿消息(補遺)は、県立長野図書館蔵の断簡。全集本に『補遺』として付す。

○六十にふたつふみ込む夜寒哉

㊀　七番日記(文化11・7)

㊟　中七「二ッふみ込む」。

うそ寒をはや合点のとんぼかな

㊀　稿本発句題叢・発句鈔追加・希杖本句集

㊟　発句題叢・希杖本句集、座五「蜻蛉哉」。発句鈔追加、座五「とんぼ哉」。文化五年八月句日記、上五「朝寒も」。座五「とんぼ哉」。

○あばら骨なでじとすれど夜寒哉

㊀　七番日記(文化10・8)・志多良・句稿消息

寝莚や虱わすれて漸寒き

㊀　稿本発句題叢

㊟　稿本発句題叢、中七以下「虱忘てやゝ寒き」。七番日記(11・9)、「寝むしろや虱忘れてうそ寒〔き〕」。発句鈔追加、上五・中七「寝むしろや虱がわすれて」。希杖本句集、中七以下「虱忘れてやゝ寒し」。

朝寒や垣の茶筅の影法師

㊀　稿本発句題叢・発句鈔追加・希杖本句集

うそ寒や蚯蚓の唄も一夜づゝ

㊀　八番日記(文政2・7)

㊟　八番日記(2・7)、「うそ野(寒)や蚯蚓の歌も一夜ヅゝ」。梅塵本八番日記(文政2)、「うそ寒や蚯蚓の唄も一夜ヅゝ」。八番日記(2・5)、中七以下「蚯蚓の声も一夜ヅゝ」。

若僧の扇面に

㊟だん袋、座五「爺哉」。

月も月そも〳〵大の月夜かな

㊞ 七番日記（文化9・8）・株番・稿本発句題叢・発句鈔追加・希杖本句集

㊟ 七番日記、中七「抑〳〵大の」。株番、座五「月よ哉」。発句鈔追加、座五「月夜哉」。

○明く口へ月がさすなり隅田川

㊞ 七番日記（文化9・8）・株番

㊟ 七番日記・株番、中七「月がさす也」。希杖本句集、「あく口へ月もなすなり角田川」。

赤い月是は誰かのじ(ぢ)や子供達

㊞ 七番日記（文化8・8）・株番

㊟ 七番日記、座五「子ども達」。株番、座五「子共達」。

○秋の原知たらなんぞ唄ふべき

㊞ 文政版発句集初出

㊟ 座五「うたふべき」。

○秋日和とも思はない凡夫かな

㊞ 七番日記（文化15・9）

㊟ 文政版発句集、座五「凡夫哉」。

○なぐさみのぱつち〳〵や秋日和

㊞ 七番日記（文化15・9）・碩斎あて書簡（文化15・9・9付）・梅塵本八番日記（文政4）

㊟ 碩斎あて書簡、前書「小僧達錦(綿)勧進」。

母のなき子の這習ふに

○をさな子や笑ふにつけて秋の暮

㊞ 文政句帳（6・9）・だん袋・一茶翁終焉記

㊟ 文政句帳、上五「お(を)〔さ〕な子や」。だん袋、前書「母ニおくれたる二つ子の這ひならふに」。

立な雁住ばどつこも秋の暮

㊞ 嘉永版発句集初出

㊟ 八番日記（2・8）、上五・中七「行な雁程(住)ばどつこも」。おらが春、上五「行な雁」。句稿消息、「行な雁どつこも茨のうき世ぞや」。

病後

○ゑいやつと活た所が秋の暮

㊞ 七番日記（文化10・7）・句稿消息

㊟ 七番日記、前書なし。上五「エイヤッと」。文政版発句集、座五「秋のくれ」。

芦の穂を蟹がはさんで秋の暮

㊞ 的申集（文化13）

㊟ 画餅集（文化11）、「芦の葉を蟹がはさみて秋の暮」。発句鈔追加、座五「秋の夕」。

○中〳〵に人と生れてあきの暮

㊞ 我春集・世美塚

㊟ 我春集・世美塚、上五「なか〳〵に」。座五「秋の暮」。文政版発句集、座五「秋の暮」。稿本発句題叢・希杖本句集、上五「うか〳〵と」。

山に登る事を得たり」として、この句（座五「御側哉」）と「けふの月ひろふたやうに思はるゝ　春甫」を付す。発句鈔追加、菫草と同趣の前書を付し、「此句本集ニノセタレドモ前文アレバ又爰ニ出ス」と注。文化五六年句日記（文化6）、前書なし。座五「御山哉」。

赤馬関

○名月や蟹も平をなのり出

㊀　文政九・十年句帳写（文政9）

㊟　座五「名乗り出」。

筑摩川舟留

○名月やつい指先の名所山

㊀　文政句帳（6・8）

㊟　前書なし。

やかましかりし老妻ことしなく

○小言いふ相手もあらばけふの月

㊀　文政句帳（6・9）・一茶翁終焉記

㊟　文政句帳、前書なし。文政句帳（6・8）、前書なし。中七以下「相手のほしや秋の暮」（中七「相手のほしや」「相手のことし」と併記）。同句帳（6・9）、この句の九句前に「相手は壁ぞ秋の暮」。同句帳（7・9）、座五「花莚」。

姥捨などゝは老足むつかしく

○有合の山ですますやけふの月

㊀　八番日記（文政4・9）・一茶翁終焉記

㊟　八番日記、前書「姥捨なんどゝ草臥るも全なければ」。

月蝕

○人顔は月より先へ欠にけり

㊀　八番日記（文政2・8）

㊟　おらが春、前書「月蝕皆既亥七刻左方ヨリ欠、子六刻甚ク、丑ノ五刻右終。」。上五「人数ハ」。だん袋、前書「蝕良夜二句」。上五「人数ハ」と「人の世ハ月もなやませ給ひけり」。

○むだ草も穂にほが咲て三日の月

㊀　梅塵本八番日記（文政4）

㊟　梅塵本八番日記、前書「豊秋」。七番日記（11・9）、前書なし。中七以下「穂に穂が咲ぞ三ケの月」。

○深川や蠣殻山の秋の月

㊀　梅塵本八番日記（文政4）・文政句帳（8・9）・梅塵抄録本連句集（一茶・梅塵・痩菊三吟歌仙）・同（一茶・露谷両吟歌仙）

㊟　梅塵本八番日記、中七「蛎（蠣）がら山の」。

春耕孫祝

○門の月殊に男松のいさみ声

㊀　文政版発句集初出

㊟　中七「ことに男松の」。

○翌の夜の月を請合ふ爺かな

㊀　八番日記（文政4・9）・だん袋

出　七番日記（文化9・8）

注　七番日記・文政版発句集、座五「桔梗哉」。稿本発句題叢、「きり〳〵しやんで咲く」。

うか〳〵と出水に逢ひし木槿かな

出　文化句帳（1・9）・稿本発句題叢・発句鈔追加・希杖本句集

注　文化句帳以下いずれも座五「木槿哉」。

○むだ花に気色とられし瓢かな

出　文政版発句集初出

注　七番日記（9・7）・株番・稿本発句題叢、中七以下「けしきとられて青瓢」。希杖本句集、中七以下「気色とらるゝ瓢かな」。

萩の末芒のもとや喰祭

出　稿本発句題叢・発句鈔追加

注　発句題叢、中七以下「下や喰祭り」。発句鈔追加、「萩のすへ(あ)芒のもとや喰祭り」。

○江戸川や月待宵の芒ふね

出　文政版発句集初出

○名月やまづはあなたも御安全

出　文虎あて書簡（文政4・8・12付）

注　文政版発句集、中七「先はあなたも」。七番日記（12・7）、中七以下「あなたも先〔は〕御安全」。

○名月の御覧の通り屑家かな

出　随斎筆紀・文政版発句集

注　随斎筆紀、座五「屑屋哉」。文政版発句集、座五「くづ家哉」。文化五年八月句日記、座五「屑屋也」。

病中

○名月やとばかり立居むづかしき

出　七番日記（文化10・8）・志多良

注　七番日記、上五・中七「名月〔や〕とばかり立い(ゐ)」。志多良、「先ズル時ハ制ノ人」で始まる文に添えた四句中の第二句。

○名月のさつさと急ぎ給ふかな

出　八番日記（文政4・8）、文政句帳（8・9）・茶翁聯句集

注　八番日記・文政句帳、座五「給ふ哉」。

○明月を取つてくれろと泣子かな

出　おらが春

注　おらが春、座五「なく子哉」。文政版発句集、座五「泣子哉」。七番日記（10・8）、「あの月をとつてくれろと泣子哉」。

名月やあてにもせざる壁の穴

出　嘉永版発句集初出

注　梅塵本八番日記（文政2）、中七「当にはせざる」。風間本八番日記（文政2・7）、中七「あたりにせまる」。

姥捨山

○けふといふけふは名月の御側かな

出　文化三―八年句日記写（文化6）・菫草・稿本発句題叢・発句鈔追加

注　文化三―八年句日記写、発句題叢・文政版発句集・発句鈔追加、座五「御側哉」。菫草、「久しく願ひけるに、北国日より定めなくて、おもひはたさるゝに、ことし文化六年八月十五日、同行二人、姥捨

出　八番日記（文政2・8）

注　中七「から紅に」は、「から紅の」の誤りであろう。八番日記、中七「唐紅の」。八番日記（2・11）、中七以下「唐紅の初氷」。

朝顔や人の顔にはそつがある

出　文政句帳（6・7）

蕣や一霜添てぱつと咲

出　梅塵本八番日記（文政2）

注　上五・中七「朝顔や一霜そつて」。風間本八番日記（2・9）、上五・中七「朝顔や一霜過て」。

○朝顔の上からとるや経(径)山寺

出　八番日記（文政4・7）

注　中七以下「上から取や金山寺」。八番日記（4・7）、中七以下「外から呼や経(径)山寺」。だん袋、中七以下「上から買ふや経(径)山寺」。

○女郎花あつけらかんと立りけり

出　七番日記（文化13・閏8、同12）・希杖本句集

注　七番日記（閏8・12）・文政版発句集・希杖本句集とも中七「あつけらこんと」。

○鬼灯を膝の小猫にとられけり

出　八番日記（文政3・9）

萩　寺

○存の外俗な茶屋あり萩の寺

出　文政句帳（8・7）

注　中七「俗な茶屋有」

○耳に珠数(数珠)掛て折なり草の花

出　文政句帳（6・8）

注　文政句帳、上五・中七「耳にずずかけて折也」。文政版発句集、上五・中七「耳に数珠かけて折なり」。

何事のかぶり〳〵ぞをみなへし

出　七番日記（文化8・8）・我春集・稿本発句題叢・発句鈔追加・希杖本句集

注　七番日記・我春集・発句題叢、座五「女郎花」。発句鈔追加、座五「女郎志(花)」

女郎花一夜の風に衰ふる

出　文政句帳（8・7）

注　座五「おとろふる」。

○入相の聞処なり草の花

出　発句類題集（文政3）

散芒寒くなるのが目にみゆる

出　稿本発句題叢・希杖本句集

注　発句題叢、中七以下「寒く成のが目ニ見ゆる」。希杖本句集、中七以下「寒く成るのが目に見ゆる」。七番日記（15・7）、中七以下「寒く成つ〔た〕が目に見ゆる」（「再案」と前書）。発句鈔追加、「ちる芒夜の寒さが目に見ゆる」。「散芒」は冬の部に入るべきもの。

穂芒やおれが小鬢もともそよぎ

出　我春集・稿本発句題叢・希杖本句集

注　我春集、「ほ芒やおれが小びんも共そよぎ」。発句題叢、中七「おれが小ビンも」。七番日記（8・8）、中七「おれがつぶりも」。発句鈔追加、中七以下「おれが白髪もとも戦ぎ」。

○きり〳〵しやんとして咲桔梗かな

○弥陀堂の土になる気かきり〴〵す

出　文政版発句集初出

注　文政句帳（7・閏8）、上五・中七「ミダ堂の土になれ〳〵」。

藪むらや灯籠の中にきり〴〵す

出　山月あて書簡（文政9・7・中元日付）

注　上五・中七「藪むらや灯ろの中に」。

○きり〴〵す声が若いぞ〳〵よ

出　文政版発句集初出

経　堂

○虫の屁を指して笑ひ仏かな

出　八番日記（文政2・7）・おらが春

注　八番日記・おらが春、座五「仏哉」。

放屁虫爺々が垣根としられけり

出　七番日記（文化11・7）・稿本発句題叢・希杖本句集

注　七番日記、上五・中七「屁ひり虫爺がかきねと」。発句題叢、上五「屁ひり虫」。希杖本句集、上五「屁ひり虫」。座五「知られけり」。

○寒いぞよ軒の蜩唐がらし

出　句稿消息

○其分にならぬ〳〵と蟷螂哉

出　八番日記（文政4・9）・だん袋

○古犬や蚯蚓の唄にかんじ顔

出　文政版発句集初出

○御祭りに赤い出立のとんぼかな

出　文政版発句集初出

注　上五「御祭に」は、「御祭の」の誤りか。七番日記（14・8）、上五「御祭の」。座五「蜻蛉哉」。八番日記（4・7）、「御祭に蜻蛉も赤い出立かな」。

二百十日

○世の中はよすぎにけらし草の露

出　志多良・希杖本句集

注　志多良、前書「二百十日晴天」。希杖本句集、前書なし。七番日記、前書なし。「世〔の〕中はよ過にけらし鳴藪蚊」。句稿消息、前書なし。座五「けさの露」。

狩好きの其身にかゝる夜露哉

出　稿本発句題叢・希杖本句集

注　発句鈔追加、上五「猟好の」。

○御目出度存候今朝の露

出　八番日記（文政3・9）

注　八番日記、上五「御目〔出〕度」。座五「けさの露」。文政版発句集、座五「けさの露」。

うどん花

○甘い露ばせをさくとて降りしよな

出　八番日記（文政3・7）

注　中七「芭蕉咲とて」。「芭蕉の花」は夏。夏の部に入るべきものを誤った。

夕やけやから紅に露しぐれ

㊟ 前書、全集本は「五十足ては」と校訂。原本、「過」は「足」にも見えるが、進繞を下に書いたと見てよかろう。七番日記、前書なし。座五「うき世哉」。株番・一茶九臧両吟、座五「うき世哉」。発句鈔追加、前書なし。座五「浮世哉」。

○露置くや茶腹で越えるうつの山

㊥ 文政版発句集初出

㊟ 中七「茶腹で越る」。七番日記(11・7)、上五「白露や」。

○露ちるや地獄の種をけふも蒔く

㊥ 七番日記(文化11・7)

㊟ 七番日記、座五「けふもまく」。希杖本句集、上五「白露や」。座五「今日も蒔」。文政版発句集、この句の前に「しら露やいつもの処に火の見ゆる」を収める。

○しら露に浄土参りのけいこかな

㊥ 志多良・句稿消息・希杖本句集

㊟ 志多良以下、座五いずれも「けいこ哉」。七番日記(10・8)・可候あて書簡(文化10・8・22付)、上五「朝露に」。

○火ともして生おもしろや草の露

㊥ 句稿消息(文化10)

㊟ 志多良、中七「生おもしろき」。

男女私にちぎりて夜ひそかに逃行を教訓して

○人問ば露と答へよ合点か

㊥ 文政版発句集初出

㊟ 七番日記(11・8)、上五・中七「いざゝらば露よ答(と)よ」。

愛子を失ひて

○露の世は露の世ながら去ながら

㊥ おらが春

㊟ 座五「さりながら」。七番日記(14・5)、前書「悼」。中七「得心ながら」。

○露ちるやむさい此世に用なしと

㊥ 七番日記(文化10・7)・志多良・句稿消息

㊟ 句稿消息、前書「秋」。

秋霧や河原撫子見ゆるまで

㊥ 文政句帳(1・8)・発句鈔追加

㊟ 文化句帳、座五「見ゆる迄」。発句鈔追加、上五「秋ぎりや」。稿本発句題叢・希杖本句集、中七以下「川原なでしこぱつと咲」。連句稿裏書、中七以下「河原なでしこりんとして」。

○あり明や浅間の霧が膳を這ふ

㊥ 七番日記(文化9・7)・株番・文虎あて書簡(文化9・7・22付)

㊟ 七番日記、上五「有明や」。座五「膳をはふ」。株番、前書「軽井沢」。書簡、上五「有明や」。

○寝がへりをするぞ脇よれきり〳〵す

㊥ 文政版発句集初出

㊟ 七番日記(13・7)、「寝返りをするぞそこのけ蚤」。

白露の玉ふんがくなきり〳〵す

㊥ 八番日記(文政2・6)

㊟ 七番日記(13・7)、中七「玉ふみかき(く)な」。

㊀　文政版発句集初出

高井野の高みに上りて

○秋風や磁石にあてる古郷山

㊀　八番日記（文政2・9）・おらが春

㊟　八番日記、前書「旅」。おらが春、前書「高井野の高ミに上りて」。

病後

○かな釘のやうな手足を秋の風

㊀　志多良・句稿消息・一茶翁終焉記

㊟　志多良、「桂好亭にわづらふこと七十五日にして」の小文に付す。句稿消息、上五「鉄釘の」。希杖本句集、座五「秋の暮」。

秋風に歩て逃るほたる哉

㊀　七番日記（文化10・8）・志多良・八番日記（文政2・7）・おらが春

㊟　七番日記、座五「螢哉」。志多良、座五「螢かな」。八番日記・おらが春、中七以下「歩て逃る螢かな」。

さと女三十五日

○秋風やむしり残りの赤い花

㊀　文政版発句集初出

㊟　おらが春、前書「さと女卅五日墓」。中七「むしりたがりし」。

○秋かぜの吹けとは植ぬ小松かな

㊀　文化句帳（2・7）・稿本発句題叢・希杖本句集

㊟　文化句帳・文政版発句集、座五「小松哉」。発句題叢、中七以下「吹とは植ぬ小松哉」。希杖本句集、中七以下「吹ケとは植ぬ小まつ哉」。

秋風や壁のヘマムショ入道

㊀　七番日記（文化8・8）・我春集

○墨染の蝶が飛なり秋の風

㊀　文政九・十年句帳写（9）・発句鈔追加・希杖本句集

㊟　九・十句帳写、中七「蝶が飛也」。発句鈔追加、中七「てふがとぶなり」。文政句帳（5・6）、中七以下「蝶の出立や秋の暮」。同（5・8）、中七「蝶もとぶ也」。同（5・9）、中七「蝶と成けり」。

正見寺の上人十ばかりなる後住を残して迁化（遷）ありし哀さに

○秋風やちひさい声のあなかしこ

㊀　文政句帳（5・8）

㊟　文政句帳、前書なし。七番日記（15・8）、座五「新乞食」。

寝莚や野分を吹かす足のうら

㊀　句稿消息・稿本発句題叢・発句鈔追加・希杖本句集

㊟　中七「野分を吹かす」は、「野分に吹かす」の誤りであろう。句稿消息・希杖本句集、上五・中七「寝むしろや野分に吹かす」。発句鈔追加、中七「野分にふかす」。

五十過ては

○露はらり〳〵大事の浮世かな

㊀　七番日記（文化9・8）・株番・茶翁聯句集（一茶・九臧両吟半歌仙）・発句鈔追加

㊟ 文政句帳（8・9）、「いとし子や母が来るとて這ひ笑ふ」。

鼠尾草や水につければ風が吹

㊞ 稿本発句題叢・発句鈔追加

㊟ 発句題叢、上五「ミそ萩や」。発句鈔追加、上五「鼠尾花や」。文化句帳（1・7）、上五「みそ萩や」。座五「風の吹」。全集本「鼠尾草」に「そびぐさ」とルビ。

○玉棚や上座して鳴きり〳〵す

㊞ 七番日記（文化11・7）・稿本発句題叢・希杖本句集

㊟ 希杖本句集、上五「聖霊と」の右傍に「玉棚や」と書込む。

魂　送

○おれが場もとく頼むぞよ仏達

㊞ 文政版発句集初出

㊟ 七番日記（文化11・7）、上五・中七「おれが座もどこぞにたのむ」。

○精霊の立ふる舞の月夜かな

㊞ 七番日記（文化12・7）・梅塵本八番日記（文政2）

㊟ 七番日記、「生(聖)霊の立ふる廻の月よ哉」。梅塵本八番日記、前文「ことし七月既望爰のぬか塚山に登る。勝景はさておき、麓の村〳〵魂送り火焚て名残をおし(を)み、天も限なく晴て、仏の帰路をてらし給ふ。さながら別世界なりけらし。」中七「立振舞の」。

○山里やあゝのかうのと日延盆

㊞ 文政句帳（7・7）・高井郡四人衆（雲里・楚江・邑雪・貞淳）あて書簡（文政7・8・23付）・希杖本句集

㊟ 文政句帳・希杖本句集、中七「あゝのこ(かう)をのと」。

○べつたりと人のなる木や宮角力

㊞ 七番日記（文化14・8）・希杖本句集

○草花を腮でなぶるや勝角力

㊞ 株番

○板行にして売れけり負相撲

㊞ 八番日記（文政4・9）・だん袋

㊟ 梅塵本八番日記（文政4）、「負相撲板行にして売れけり」。

○縁はなや二文花火も夜の体

㊞ 文政版発句集初出

㊟ 七番日記（14・8）、上五「よい雨や」。全集本、座五「夜の鉢」と誤る。

○稲妻やうつかりひよんとした顔へ

㊞ 七番日記（文化11・8）・希杖本句集

㊟ 希杖本句集、上五「稲づまや」。

たのもしやまだ薄暑き三日の月

㊞ 嘉永版発句集・発句鈔追加

㊟ 発句鈔追加、中七「まだうす暑き」。稿本発句題叢、中七以下「暑のとれぬ三ヶの月」。希杖本句集、中七「暑さのとれぬ」。

門の月暑かへれば人もへる

㊞ 嘉永版発句集初出

㊟ 八番日記（文政4・7）、中七以下「暑がつ(へ)れば友もへる」。

神　前

○秋風や草も角力とる男山

○娶星の御顔をかくす榎かな

出　七番日記（文化12・7）

注　座五「榎哉」。

七日の夜只の星さへ見られけり

出　八番日記（文政2・7）

注　中七以下「たゞの星さい見ゝれけり」。希杖本句集、上五「六日の夜」。

星待や亀も涼しいうしろつき

出　文化句帳（2・7）・稿本発句題叢・発句鈔追加・希杖本句集

注　発句題叢・希杖本句集、前書「不忍池」。発句鈔追加、座五「後つき」。

○子宝が蚯蚓のたるぞ梶の花に

出　七番日記（文化11・7）・希杖本句集

注　座五「梶の花に」は、「梶の葉に」の誤り。七番日記・希杖本句集・文政版発句集とも「梶の葉に」。全集本七番日記、中七「蚯蚓かたるぞ」と校訂するが、講談社版の複製本及び『全註一茶七番日記』によって、「蚯蚓のたるぞ」とする。

病中

○うつくしや障子の穴の天の川

出　七番日記（文化10・7）・志多良・句稿消息・希杖本句集

注　七番日記、中七以下「せうじの穴の天川」。志多良、前書「七夕同（病中）」、中七「せうじの穴の」。句稿消息、前書「病」、中七以下「せうじの穴の天川」。希杖本句集、「病中」と前書して、「下駄からり〳〵夜長のやつら哉」の次にこの句を収める。

○木曽山へ流れ込けり天の川

出　文政版発句集初出

注　七番日記（15・7）、上五・中七「木曽山に流入けり」。八番日記（3・7）、上五・中七「古郷に流入けり」。

草鞋ながら墓参りして

○息才で御目にかゝるぞ草の露

出　七番日記（文化14・7）

注　前書「わらぢながら墓参」。文政版発句集、前書「わらぢながら墓参りして」。

あの月は太郎がのだぞ迎鐘

出　七番日記（文化11・9）・稿本発句題叢・希杖本句集

注　発句題叢・希杖本句集、座五「迎ひ鉦」。発句鈔追加、中七「太郎がものぞ」。

○末の子や御墓参りの箒持

出　句稿消息

注　中七「御墓参の」。

迎火は草のはづれの〳〵かな

出　文化五・六年句日記（文化6）・発句鈔追加・希杖本句集

注　文化五・六年句日記、上五「迎ひ火は」。稿本発句題叢、上五「送り火ハ」。

亡妻新盆

かたみ子や母が来るとて手をたゝく

出　文政版発句集初出

〔研究ノート〕

# 嘉永版『俳諧一茶発句集』入集の句（五）

黄色瑞華

**凡例**

一　一行めに、嘉永版『俳諧一茶発句集』をおく。ただし、漢字はおおむね現行文字とした。また、「もとの集」（文政版『一茶発句集』）にあるものは、句頭に○印を付した。

二　二行め以下に、㊥として、初出及び他書に所収の有無を書名等によって注した。

三　句形等に嘉永版発句集と異るものがある場合、㊟以下にそれを示した。

四　嘉永版発句集の他は、主として一茶全集本により、必要に応じて一茶叢書本その他によった。例えば、『浅黄空』（叢書本）、『希杖本発句集』（荻原井泉水校訂『一茶遺稿・志多良』岸波書店）、『一茶発句鈔追加』（栗生純夫『一茶新考』西沢書店）などがそれである。

## 俳諧一茶発句集　下

### 秋の部（承前）

○秋立や隅の小隅の小松島

㊥　株番（文化9）

㊟　中七「隅の小すみの」。

狗子有仏性

○秋来ぬとしらぬ狗が仏かな

㊥　文政版発句集初出

㊟　八番日記（文政3・7）、前書「有狗子仏性」。上五「けさ秋と」。

○星さまのさゝやき給ふけしき哉

㊥　句稿消息（文化年中）

褌に笛つきさして星むかひ

㊥　稿本発句題叢

㊟　発句題叢、中七以下「笛突さしてほし迎ひ」。七番日記（文化11・7）・発句鈔追加・希杖本句集、「ふんどしに笛つゝさして星迎」。

○犀星にいで披露せん稲の花

㊥　七番日記（文化12・7）

歌書や梶のかはりに糸瓜の葉

㊥　八番日記（文政2・7）